

Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ —実践の継承と新学習指導要領を踏まえたこれからの学校づくり—

今回の学習指導要領の改訂では、これからの社会を生きる子どもたちが必要な資質や能力を身に付けることができる教育課程の実現のため、主体的・対話的で深い学びを通した「生きる力」の育成や、学校を有機的な組織として機能させていくカリキュラム・マネジメントの確立が強調されています。これから子どもたちは、高度に情報化し、少子高齢化が進み、グローバル化も一層拡大する社会を生きることとなります。ですから、学校教育に携わる私たちが、この新たな方向性をしっかりと見据えていく必要があります。

しかし、正直なことを言えば、これまで慣れ親しんできた学習指導要領からの変化を手放しで歓迎できない気持ちも、一方であるのではないのでしょうか。私たちが誰も経験したことのない社会を生きる子どもたちをどのように支えていけば良いのか、答えの出ない課題に雲をつかむような思いを持つというのも、偽らざる気持ちでしょう。

一方、新学習指導要領で謳われている方向性は、私たちにとって決してなじみがないものではありません。子どもたちに必要な力を考えること、主体性や関わりを重視して日々の授業を作り上げること、そして学校を組織として捉えていくことは、むしろこれまでも私たちが（明確に、あるいは暗黙のうちに）大事にしてきたことではないのでしょうか。そういう意味では、新たな学習指導要領は、これまで私たちが取り組んできたことの延長線上にあるものと言えるように思えます。

こう考えたときに重要になってくるのは、新学習指導要領に沿って実践をどう変えていくかではありません。むしろ、新学習指導要領に沿いながら、これまで培ってきた実践をどのように継承していくのか、この点にあるように思います。この「継承」というキーワードは、これまで Zone A が掲げてきた「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマに深く通じます。学校における実践の継承は、個人から個人へ伝達されるものというより、教師のコミュニティの中で行われることだからです。このように考えるならば、教師のコミュニティにおける実践の継承は、子どもたちを支える学校づくりの核であるとも言えるはずです。

そこで今回 Zone A では、「実践の継承と新学習指導要領を踏まえたこれからの学校づくり」というサブタイトルを掲げることにしました。ポスターセッションでは、このテーマに基づいた様々な取り組みを、ポスターを通して発表いただきます。続くシンポジウムでは、新学習指導要領で謳われるような取組を長年にわたって展開してきた学校の先生方をお呼びし、実践、研究、そして継承についてお聞きします。さらに、最後のフォーラムでは、参加者の皆さんはどのように考えるのか、それぞれのお立場から語り合う時間を持ちたいと考えております。この3つのセッションを通し、これからの学校教育における教師コミュニティの可能性について、皆さんと深め合うことができればと考えております。

Orientation 13:00-13:10	ガイダンス			
Session I 13:10-14:10	ポスターセッション			
Session II 14:20-15:50	シンポジウム			
〈シンポジスト〉	奈良女子大学附属小学校	阪本一英	教諭・西田淳	教諭
	信州大学附属松本中学校	矢島裕文	教諭	
〈コメンテーター〉	福井大学附属義務後期課程	牧田秀昭	副校長	
Session III 16:00-17:40	フォーラム			

Zone B 教師

「21世紀の教師教育をイノベーションする」

B1 有識者会議の報告を受け教師教育はどこに向かうのか —教科の専門性と教員研修の明日を問う—

Zone B では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、“21世紀の教師教育をイノベーションする”をテーマとしています。

現在、教育界は、戦後の教育改革に次ぐ、いやそれを凌ぐかもしれない教師教育改革の真ただ中にあります。

国立教員養成大学・学部・大学院・附属学校の改革に関する有識者会議報告（H29.8.29）は、その岐路を示すものではないでしょうか。教師教育の変貌と衰退、どちらの一步になるのか。十分な議論がなされた上で決断した場合には、各大学が一举に動く決意が必要であると思われるます。

このシンポジウムでは、有識者会議の主査として報告をまとめられた 加治佐哲也氏（国立高等専門学校機構監事・前兵庫教育大学学長）からは具体の政策としてどのようなことが考えられるか、出口利定氏（日本教育大学協会長・東京学芸大学学長）からは報告における乗り越えなければならない課題について、常盤豊氏（文科省生涯学習政策局長）からは生涯学習の視点で見た教師教育について論じていただき、参加者の皆様方と明日の教師教育の展望を開きたいと考えております。

Orientation	13:00-13:10	ガイダンス
Session I	13:10-14:10	ポスターセッション
Session II	14:20-17:40	シンポジウム

〈シンポジスト〉 国立高等専門学校機構監事・前兵庫教育大学学長 加治佐 哲也 氏
日本教育大学協会長・東京学芸大学学長 出口 利定 氏
文科省生涯学習政策局長 常盤 豊 氏

〈コーディネーター〉 福井大学教職大学院教授 松木 健一

B2 これからの教員養成を学部・大学院を通して考える —実践を聴き、夢を語る—

教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ、とりわけ教職免許法の改正にともなうカリキュラムの改変が求められてきています。しかし、長い蓄積のなかで培われてきた組織の中で、新しい課題への取り組みを進めていくことには大きな困難がともないます。それぞれの実践や経験を活かした、当事者としての知恵が問われてきていると思います。

今年6月に開催されましたラウンドテーブルの【Zone B2】では、学部の教員養成に携わる当事者である教員によるセッション B2 (a)「これからの学部段階の教員養成を考える 実践を聴き、夢を語る」と、その教員養成課程に身をおく学部学生によるセッション B2 (b)「学部学生のクロスセッション 授業/活動-語ろう・聴こう・出会い直そう-」が開催され、各セッションにおいて、互いの取り組みを聴き合い、語り合うセッションが行なわれました。そこでは、教員のみならず、教員養成課程における学びの主体者である学部学生の視点からも「教職への夢を語る教員養成」を展開していくための多くのヒントが出されました。ただ、教員と学生

間でのセッションを超えての議論には十分に発展せず、互いにこれからの教員養成について、どのような考えをもっているのか、どのようなカリキュラム、学びや経験を期待しているのかなど、新たな「問い」が生まれてきました。さらに、今後福井大学での喫緊の課題でもある、学部と教職大学院の接続は、日本の教員養成の共通課題であり、そこで、学部段階における教員養成は、教職大学院への接続も想定しながら、その在り方を考えることが求められています。教職大学院では実践をベースとして、学校での長期のインターンシップを通して学校の総体を学び、現職院生とともに日々の実践を語り合い、省察することが学びの中心に据えられています。そうであるならば、その前段階である学部における教員養成が担う役割は何なのか？この「問い」は、今日教職大学院が全国的に拡がりを見せるなかで、全国の教育学部に共通する課題であるといえます。

そこで、今回は、これまでの【Zone B2】での経験を踏まえ、前回同様、少人数で多様なメンバーが大学を超えて教員養成の取り組みを語り合う場を設けたいと思います。またそれに加え、今回は、今後学部を卒業して教職につく学生と教職大学院に進学してさらに学びを深める学生双方の学部・大学院段階での学びや教員養成の取り組みをどのように支えていくのかについて考えていきたいと思います。それぞれの取り組み、そこでの工夫、あるいは課題や悩みも含めて共有し、学び合いながら、教員と学生の垣根を超えてこれからの学部・大学院における教員養成への夢を当事者として語り合えればと思います。多くの教員、学生、院生の参加をお待ちしています。

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス

Session I 13:10-14:10 ポスターセッション

Session II 14:20-17:40 グループセッション

① 話題提供 武蔵野美術大学からの実践報告 (30分)、休憩

② ①を受けた教員と学生のセッション (90分)、休憩

③ ②を受けた教員と学生を分けた別グループでのセッション (60分)

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする —つながりの編み直しを支える—

現在、急速な科学技術の高度化やグローバル化、少子高齢化が進む状況のなか、地域が直面する課題も複雑なものへと変化し続けています。言うまでもなく、地域とは共同的かつ長い時間をかけ歴史的・社会的に構築されてきたものです。この大きな変化の時代において、今後地域が萎縮・融解へと向かうのか、あるいは発展・保全へと向かうのか、現在私達はその岐路に立っていると言えます。Zone Cでは後者を展望し、長い時間の見積もりを持った地道な実践の積み重ね、歩み、そしてその展開を地域・世代・領域を超え検討し、更にここ数年はコミュニティの発展における「持続性」に焦点を当て、互いの実践から学び合っています。

前回および前々回では、コミュニティの持続的な発展を支えているものとは何かといった初発の問いに立ち返り、コミュニティのコミュニケーション構造や組織化について検討を重ねてきました。前回までの検討を踏まえ今回は「つながりの編み直しを支える」コーディネートの可能性およびコーディネーターの力量形成に焦点を当てていきます。社会教育の文脈においては現在「社会教育主事養成制度」の見直しが行われており、平成32年度に新制度の施行が予定されています。また、学校教育の文脈においては「学校と地域の連携・協働」のあり方と今後の推進方策が中央教育審議会答申にて提起されています。多くの地域コーディネーター、学

校関係者、地域・教育活動に取り組んでいる学生さん、そしてあらゆる世代・領域の方々の参加をお待ちしています。

- Orientation 13:00-13:10 ガイダンス
Session I 13:10-14:10 ポスターセッション
Session II 14:20-17:40 シンポジウム
〈シンポジスト〉 京都市役所 京都市まちづくりアドバイザー 谷 亮治 氏
福井市中央公民館主事 田村 栄子 氏
〈コメンテーター〉 福井大学教職大学院 富永 良史
Session III 16:00-17:40 フォーラム
Session II での話題提供を受け、小グループでの実践の交流を行います。

Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

いま、子どもたち自身が主体的に課題に向き合い、さまざまに対話を重ねながら探究し、学びを深めていく学習の在り方が求められています。そのためには、私たち自身の学習観を問い直し、専門職として協働して学び合いながら、授業や保育の質を高めていく授業研究・保育研究が重要となります。こうした背景のもと、ZoneDではこれまで、子どもと教師の学びを支えるための授業研究・保育研究について考えてきました。

一方で、こうした改革は日本に限定されたものではなく、世界的な動向とリンクしたものもあります。たとえばOECDではこれからの時代に必要となる新たなキー・コンピテンシーが検討されつつあります。また日本で行われてきた授業研究は「レッスン・スタディ」として知られ、各国でさまざまに行われています。日本の授業研究もまた、より良い形の模索が続いています。

そこで今回は、これからの授業研究・保育研究をいかに組織するのか、各国の現状を踏まえて、どう深化させていくことができるのか、考えていきたいと思えます。

「シンポジウム」では、フィリピン、マラウイ、日本から、教育にかかわる先生方に登壇いただき、それぞれの国の現状の中で、子どもや教師の学びを支える授業研究・保育研究をどのように進めつつあり、どう深化させていこうとしているのか、話題提供いただき、議論を行っていきます。

シンポジウムでの問題提起を踏まえて「フォーラム」では、参加者がそれぞれの現場で何ができるかを考えていくために、大まかに校種や領域で部屋を分かれます。それぞれの分科会で話題提供者から具体的な実践を簡単に紹介いただいた上で、小グループで話し合い、深めていきたいと思えます。

- Orientation 13:00-13:10 ガイダンス
Session I 13:10-14:10 ポスターセッション
Session II 14:20-15:50 シンポジウム

「子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか～各国の現状を踏まえて、どう深化させていくか～」

〈シンポジスト〉 フィリピン大学国立理数教育開発研究所 ウレップ・ソレダドゥ氏
マラウイ カトト中等教育学校長 クリストファー・ニヤスル氏
福井県立若狭高校 小坂 康之教諭

〈コメンテーター〉 福井大学教職大学院 高阪 将人

Session III 16:00-17:40 フォーラム

Session II での話題提供と校種別の実践報告を受け、小グループでの実践の交流を行います。

〈実践報告者〉

A. 「保幼小の実践に学び合う」

滋賀県愛荘町立秦荘幼稚園教諭 今居 静香氏
長野県伊那市立伊那小学校教諭 宮川 達也氏

B. 「中学校の授業研究の展開をマネジメントする」

信州大学附属松本中学校教諭 北原 遼司氏
福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程教諭 木下慶之氏

C. 「特別支援教育の実践に学び合う」

福井県立嶺南東特別支援学校教諭 河端 稔氏